No.6
2001. 3. 1

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

■発　　行　特定非営利活動法人
地球の木 理事会
■発行責任　横川芳江
■編　　集　広報部
■事 務 局　〒222-0033
横浜市港北区新横浜2-8-4
TEL　045-471-5536
FAX　045-471-5543
E-Mail:CZR10753@nifty.ne.jp

CONTENTS

●私にできる国際協力　●知ることから始めよう　●学びあう交流を求めて　●支援地から<子どもたちの生活>
●ラオス調査報告　●ネパール調査報告　●「ボランティア未来論」を読んで　●INFORMATION

私にできる国際協力

理事　筒井由紀子

それはタイから始まった

タイのチェンマイで筆者

民族衣装とTシャツ

エスニックな民芸品が大好きで、6年前に初めて、タイのチェンマイを訪れました。ナイトバザールでは美しい民族衣装が売られているのに、村人はTシャツ姿。そして、後をついてまわる子どもたち。中が丸見えの粗末な小屋が立ち並ぶそばには、コンクリートの立派な学校がありました。子供に「学校は？」と聞くと「今日は調子が悪いから休んだ」と母親。大きな目をくりくりさせ、楽しそうについてくるこの子どもたちすべてが具合が悪いようにはどうしても見えません。その後もいくつかの比較的豊かな村、観光地化された村、貧しい村を回りましたが、共通していたのは隣接する立派な学校でした。「途上国に学校を建てよう！」という話は日本でもよく聞くけれど、果たしてどのくらい機能しているのか？そして先祖代々の伝統文化である民族衣装を切り売りしている彼らの現状は？

自分たちの「消費生活」を見直す

日本に帰ってからもタイのことが気になり、「地球の木」のタイチームに入りました。私の国際協力のはじまりです。普通、国際協力と言えば、海外の人に何かをしてあげるという発想になるのですが、このタイでの経験から私には「支援って何？」ということが大きなテーマになっています。その後、「地球の木」で「タイのシニットさんの本を読む会」を始めました。一昨年、その本を翻訳して、「母のキッチンガーデンから」を出版しました。その中で私たちが学んだのは「開発」「南北問題」とそれに加担する私たちの消費生活の関係でした。つまり、あふれるモノに囲まれた私たちの豊かな生活は、「途上国」と呼ばれる国の犠牲の上に成り立っている。だからこそ、国内で自分たちの「消費生活」を見直すことも、大切な国際協力だということです。こうして、今まで自分の家族のために続けてきた生活クラブの活動と、国際協力が繋がったのです。

もっと語り伝えたい

昨年、連続講座の講師としてJVCのタイチームに招かれました。テーマは「私たちにできることって？～食から考える国際協力～」でした。打ち合わせの時、豚を一頭買いするのでヒレ肉ばかりを注文することはできない話をすると、若い人たちが目を輝かして大きく反応をするのにびっくり。ここで実際に何をすべきか、に結び付けていくことが「地球の木」の大切な役割となるわけで、生協運動がベースのNGOならではの経験、情報を語り伝えていくことが必要だと実感しました。

環境破壊、貧困、経済格差の広がりなど、地球規模の問題が山積するなかで、とうとう21世紀を迎えました。決して楽観できない状況のもとで「考える消費」を実践し、生活者としての視点で地域に根差して国際協力をすすめる「地球の木」の活動は、今後ますます重要になっていくでしょう。それは「今、私たちにできること」というより「しなければならないこと」なのかもしれません。

知ることから始めよう

地球市民として学び、行動につなげる

「自然や地球環境を大切にする国」を21世紀の国のあるべき姿として1位にあげたのはどこの国の人たちでしょう？この国では、回答者の61%がこのように答え、「経済的豊かさを追求する国」と答えた人37%を大きく上回りました。さらに77%の回答者が、ある程度生活が不便になっても環境保護を重要視してほしいと答えました。実は、これは読売新聞社の行なった世論調査の結果で、日本人の意見なのです。物よりも心の豊かさを求める傾向は、何もごく最近のことではなく、1980年ごろすでに見られたそうです。この調査結果で見る限り、意識の上では相当に環境のことを気にしている国民だと言うことができるでしょう。

ところが80年代から今まで、環境の改善に日々努力している人はどの位いるのでしょう？地球温暖化が論議された京都会議から3年経った今、二酸化炭素の排出量の削減は遅々として進みません。ごみの量は一向に減る気配を見せていません。知るだけでなく、そこからさらに伝え、行動し、力を集めて訴えていく。これこそがまさに21世紀の私たちに求められているものです。

では、どう行動すればいいのでしょう？昨年の地球の木フォーラムがきっかけとなった一例を紹介しましょう。

激流となって私たちを動かした ヒマラヤの雪解け水

湘南 堀 千鶴

地球の木の会員。地域の人達と共に、「くらし・環境・再生ネットワーク」というグループを作り、リサイクルショップひまわりを拠点として活動しています。地球の木地域フォーラムに実行委員として参画しました。

市民の力の大切さを語るシュレスタさん

シュレスタさんとの出会い

地球の木地域フォーラム「識字教室がもたらしたもの」に企画の段階から参加する機会に恵まれました。学習をすると共に、5,000枚のちらしを配って近隣の人たちに知らせ、ニルマラさん、シュレスタさんの来日を待ちました。講演の内容は心に訴えるすばらしい内容でしたが、それにもまして我が家にホームステイしていただいた時に直接語り合ったことが行動への大きなエネルギーの源となりました。シュレスタさんは疲れも見せず、家に集まった地域の人たち約20人にネパールのことを熱く語ってくれました。その時の彼は真剣そのものでした。地球温暖化の影響でヒマラヤの雪が解け、天気のよい日に鉄砲水のように村を襲う話でした。一度に数百人の人々が生活の場や命までも奪われることがあり、しかもその人たちにはどうすることもできないのです。さらにこの水はアジア各地の洪水につながっていることを、直面する国の方から直に聞き、大きな衝撃を受けました。地球温暖化については知っていたつもりでしたが、もっと便利に、もっときれいにと何気なく欲求のままに物質的豊かさを得ようと行動している日本の私たちのくらし方がひいては同じアジアの人々を苦しめているという事実が具体的、より明確になったのです。

語りつぎ、輪を広げよう

いままで衣類等のリユース、リサイクル推進活動を通し、物質的豊かさの追究から人間的で自然と調和できる社会＝持続可能な社会に向けてくらしのあり方を見直していこうと語ってきましたが、よりリアルに伝えずにはいられなくなりました。この時シュレスタさんと語り合った人達、またショップでの交流会で触れ合った人達も含めると約40名がこのことを多くの人に伝えたいと、話し始めました。1日30～40名に語って2ケ月。もっともっと大ぜいの人々と共有したい。互いに自立し、アジアの人々と共に生きていくために何をすべきかを具体化させ、スタートを切ろうということになりました。そこで主体的に活動している市民グループと連携し、「私たちのくらしとアジア、そしてネパールの人々」と題したフォーラムを企画しました。

シュレスタさんが言っていた、「ひとり一人の力は小さいけれど、ひとり一人が考え行動していかなければ、何も解決していかない」そのひとりに私達がならなければいけない時です。

ひまわり一周年フォーラム　「わたしたちのくらしとアジア、そしてネパールの人々」
日時：2001年3月24日(土) 13:00～15:30　内容：ネパールのこと、くらしと温暖化、衣類のリサイクルの現状
場所：六会駅前公民館1F

学び合う交流を求めて

20世紀も押し詰まった12月初旬、
3年前から交流を続けてきたタイの
NGO「タイホフ」視察のため、
バンコクへ行ってきました。
今回は、タイホフ・スタッフや
会員との友好を深め、話し合いを
もつことができました。

タイ・チーム　岩瀬 直子

村の伝統を守り、都会に伝えるタイホフの活動

ハーブや自然農業の普及に力を入れているタイホフ（タイ健康財団）は、東北タイのヤソトン県クチュムの村人達が生産する無農薬米や伝統的薬草の医薬品・自然食品などをバンコクの会員に販売しています。その収益は村人の安定した収入を約束し、財団運営資金にも還元されます。NGOとして100%の自立を目指しているのです。伝統的医療（ハーブサウナ、マッサージ等）の普及にも力を入れています。タイホフでは、健康の問題は生活全体の問題と考え、会員向けのヨガや太極拳・薬草のセミナーを定期的に開催、新聞のコラムやラジオ番組も担当して、消費者教育に力を入れて活動しています。

消費者同士の交流ができた！

タイホフ直営店前の緑豊かな公園には、50人以上の参加者が朝早くから私達を待っていてくれました。地球の木は環境と健康をテーマにしたワークショップを行いました。参加者は合成洗剤の中の光る蛍光剤の実験や合成界面活性剤による魚のえら破壊死のビデオ画面に大きな衝撃を受け、石けんの作り方に強い関心を示して説明を熱心に書き留めていました。急速な工業化を目指して開発されたバンコクは日本同様、公害や化学物質によって川も大気も汚染されています。意識をもった生活者にとって不安なことはいっぱいあります。

「死にたくないからだよ」これは、会員になった理由を質問した時、最初に返ってきた50代男性の答えです。誰でも身を守りたいのは同じです。いかに行動するかが問題なのです。会員の口からは、タマチャート（自然）という単語が多く発せられていました。アンケートの中にも、出来るだけ環境にやさしい物、自然の物を使い、生ゴミは庭に埋める。過剰包装の品物は買わないなど、自然を意識している生活が読みとれます。

共に地球を守る運動を

タイと日本には、資源を安く提供する側とされる側、支援する側とされる側という関係ができてしまっています。しかし、タイホフと地球の木には、「環境問題を地球規模で考え、地域で活動するNGO」という共通の理念があります。日本では「より安く、より多く」という、人を煽るようなテレビ番組に、多くの人々が振り回されています。しかしその商品を作っている人達のことを忘れてはいないでしょうか。タイホフの活動は、生産者と消費者、そして地球を守る活動です。そしてその力強い行動力から私達が学ぶことはたくさんあります。相互スタディツアーの開催、会報誌の交換、フェアトレードの可能性を探るなど、より深い関係を作っていきたいと考えています。みなさん、一緒にやりませんか。

クイズに答える参加者たち

支援地から ●●子どもたちの生活●●

カンボジアから

好きなこと

「何をして遊んでいるの」と聞くと、サンダル投げ、テレビといった答えが返ってきました。子供たちの世話をしているチャーロッオウブルダイ（地球の木が支援しているチャイルドケアセンター）の寮母さんの家族の部屋にはテレビが置いてあります。精米機の置いてある倉庫のような納屋のような建物の片隅が彼らの住まいです。粗末な板で囲ってあります。どうも時々その中に入って、どの子も、テレビを見ているようです。男女の歌手が歌を歌っているところを絵に描いていたのもテレビの影響でしょう。また、草の茎を互いに引っ掛けあって引っぱり、切れた方が負けという遊びは、私たちが昔、ハコベでやったのと同じ遊びのようでした。

また、ここでは、男の子が多いので、やはりみなサッカーが好きなようです。子供たちのプロフィールの好きな遊びの欄には、みなサッカーの文字が書かれていました。プノンペンでも、大通りのグリーンベルトでサッカーをやっていました。

JVCの支援地では、子どもたちが何かをひっぱっているのでよくみると砂糖やしの葉で作った虫の形をしたおもちゃでした。よくできていたので写真にとらせてもらいました。きっと自分たちで作ったのだと思います。どの子も私たちの後をついて回って、好奇心いっぱいのニコニコ顔が印象的でした。

（ほくぶ　小泉 恵子）

ラオスから

いずこも同じ

カンムアン県ナンブー村の女性たちは20歳前後で結婚します。子どもの数は平均して4人から6人、一番多い人で８人の子どもがいます。子どもたちは村にある小学校に通っています。午前の授業が終わると家へ帰ってお昼ご飯を食べ、３時間後にまた学校へ戻り授業を受けています。都市に近いこの村では、ほとんどの子どもたちが中学校まで進学しています。

国道13号線沿いに車で走っていると、子どもたちの登校時間にぶつかりました。女の子たちは白いブラウスにシンと呼ばれる黒い色の巻きスカートをはき、男の子たちは同じく白いワイシャツに黒いズボンをはいています。その風景は日本の子どもたちの通学風景とまるで同じ。仲良しグループの道連れで歩いています。

民族衣装シンを着たラオスの少女

母親たちは、自分の子どもたちの将来の生き方は子どもたち自身に任せたいと考えています。そのためには、自分の人生を選ぶための知識を持たせるために、子どもが希望すればできるだけ都市にある高校に進学させたいと言います。ラオスでは識字率44％でけっして高くはありませんが、こどもの教育には関心が高いようです。子どもを思う母親の気持ちは万国共通です。

（ほくぶ　飯田 信子）

フィリピンから

子どもは村の働き手

私が最後にネグロスへ行ったのは昨年の春、滞在した地域はサンフリアンでしたので、そこでの子ども達の生活を知る限りでお伝えしたいと思います。

サンフリアンでの子ども達の姿は、遊ぶというよりは大人と共に生活している、といった感じです。子どもは村でも重要な働き手なのです。現に、あたりを見回すだけでもかなり小さな子が赤ん坊をおぶっている姿を目にします。ちょっと離れた井戸に水を汲みに来ている子ども達の姿を見かけました。家の手伝いもあたりまえです。ご飯の支度や掃除、洗濯、収穫した豆の殻むきなどもしていました。ヤシの木に登るのは大人や若者が多く、そんな時子ども達は、下で見ていて落ちてきた実を拾います。こうして見ながら様々なことを学んでいくようです。

まかされる仕事の合間に、子ども達はゴムダンやボール遊び、パチンコなどをしていました。放し飼いの鶏や犬とじゃれたり、あやとりもしていました。

現在この地域では、就学前の子どもを対象にした幼児ラーニングセンターが開かれています。歌やリトミック、読み書き、挨拶の仕方などを学んでいました。

これは幼稚園で教えている私にとってとても興味深く、今後もその内容をみてみたいと思っています。

（とうぶ　大貫 駒）

ネパールから

仕事が楽しみ？

タライの朝は底冷えがする。ワラのベッドが心地よく、なかなか起き上がれないでいると、たった一つある小さな窓から、壺を頭にのせて裏の畑に水やりをする女の子の姿が見える。井戸と畑を何往復もしている。外に出るともう水牛を駆って脱穀が始まっている。　子ども達が、縄と竹で作った万能いすを日当たりのいい場所に運んできて学校に行く前の一時、黙々と勉強している。なるほど夜はランプの灯りの下では勉強もはかどらないからだろうか。リーダー、アルジの息子は英語を勉強している。年上の女の子たちは洗濯や家畜の世話をしながらおしゃべりに余念がない。私たち、お客様が起きると子ども達がワァーと部屋に集まってきて楽しそうにワラの束を運ぶ。ワラの山まで引きずっていって一気にかけあがる。子ども達はそれぞれに課された仕事を楽しんでやっているようだ。

そういえばタルー族の子ども達が玩具で遊んでいるのを見たことがない。都会の子ども達はビー玉、ゴムとびなど懐かしい遊びをしている。日本の子どもだったらすぐ飽きてしまいそうな単純な遊びを延々とやっている。

カマイヤ（隷属的労働者）の子ども達が60パーセントを占めるシセイヤ村の小学校で600人以上の生徒たちと交流した。「楽しみは何？」と尋ねたら「ネパール語や算数の勉強」「お正月にはジャングルにピクニックに行くんだ。ごちそうが食べられるから楽しみ」という応えが返ってきた。昨年7月にカマイヤ解放令が出て、家や土地もないままジャングルへ移住した人々がいたが、ここシセイヤ村では、地主とカマイヤの関係は良好で「小学校をやめさせたくないからここを離れない」という家族が多い。

（なんぶ　　乳井 京子）

●ラオスの女性たちは今●

理事　若林 英子

ラオス調査報告

ナタート村での聞き取り調査

５年ぶりにラオスに調査に行ってきました。調査の目的はJVCを通じて行なっている森林保全・自然農業・ジェンダー研修の支援状況を見てくることでした。そのうち特にジェンダー研修の状況を知るために、カンムアン県のナタート村とナンプー村を訪問しました。事前に村の女性たちと交流をしたいと伝えてあったせいか、各村とも30名以上の参加者がありました。村から女性2名と男性1名が県主催のジェンダー研修を受け、それを村に持って帰り村人に伝えます。各村には女性同盟のリーダーがおり、その人を中心に７～10のグループに分けられています。

２つの村ともジェンダー研修を受ける前は、男性と女性の役割が決まっており、女性が過重な労働を担っていましたが、研修後は男性が水汲み、子どもの世話など出産以外は全てを手伝ってくれるようになってきました。また以前はお酒を飲む場所に女性が参加することはありませんでしたが、最近は夫婦で出かけることもあり、男性も「男同士よりも楽しい」と話していました。

家庭での決定権も以前は男性にありましたが、今は女性の意見も取り入れられているとのことでした。２つの村に言えることですが、男性が研修を受けた後は女性の意見を素直に受け入れるようになったと、女性たちはみな口を揃えて話していました。しかし、その後ジェンダー研修センターを訪問した時の女性同盟の方の話では、まだまだ受け入れられない男性もおり、これからだということでした。

昨年、研修センターが建てられ、研修ハンドブックもできましたが、ジェンダー研修はまだ始まったばかりです。これからはそれらを有効的に活用し、進められていく予定です。具体的には村の女性に経理の研修を受けさせ、コメ銀行の経理を担当させることで、村の委員会のメンバーとして女性の意見を反映させることができるようにしていきたいと、県の女性同盟の副代表ケオウラーさんが話していました。JVCでも昨年よりジェンダー担当として現地の若い女性を採用し、村の女性の声を聞いていこうとしています。

共同農園で…

ことば

女性同盟

ラオスは社会主義の国で、ラオス人民革命党の一党独裁政権である。女性同盟はその中で女性の地位向上を目的とした組織。全国に2,700名メンバーがおり、村でリーダーとして活動している。

●夢は広がる

ネパールチーム　乳井 京子

ネパール調査報告

建設中のコミュニティセンターの前で

大晦日にネパールの調査から帰ってきました。支援を始めて今年で５年目。今、タライに朝がやってきたという感じです。今年度ニムディ村は成人識字率100パーセント、大勢のリーダーが育っています。コミュニティーセンターの完成も間近、次に何が起こるか目が離せません！

SOARSは人づくりの名人

「ヨケホタァタ？（これが何だか分かりますか？）」目隠しをした生徒役のバスラムに先生役ラジクマールが黒板消しを見せて質問をします。円座になった同じく生徒役の研修生達にもひとり一人見せて回ります。バスラムは目隠しをされていますから何を見せられても見えるわけはありません。ただ首を横に振りつづけるだけです。まわりの研修生達はおなかを抱えて笑っています。教育がないと何も分からない、ということを体験させるSOARSの教師トレーニングの一こまです。去年上級教室を教えていたというクリシュナに質問してみました。「女性達は意思決定ができるようになりましたか？リーダーは育っていますか？」「信じられない速さで育っています！女性の方がミシン教室等いろいろなトレーニングに参加する機会が多いので、創造力があって意見をよく言います。95パーセントがリーダーになる素質をもっていますね」と胸を張って誇らしげに答えてくれました。「政府のトレーニングも受けたが、読み書きの教え方だけだった。SOARSの研修は専門的で、自己開発・リーダーシップなどに重点がおかれている。初めて何をすべきかが分かった。」と先生達の間でも好評でした。

学んだことは即行動に

識字教室で森林伐採の害悪について学んだ人々は政府の植林課に苗を要求し、VDC（行政村）が女性グループに寄付してくれた7.5ヘクタールの土地で植林を始めました。牛や水牛が苗を食べないように材木を持ち寄って柵を作り見張りも雇ったと言います。貯蓄の勉強をすると早速貯蓄グループをつくり、貯まったお金で子豚を10頭買いました。メス豚は3回目の妊娠中。毎回9～10匹の子豚を産むので収入を得ることができるようになり、自分達も食べられると喜んでいました。地球の木の支援で建設中のコミュニティーセンターにも、120世帯の地域住民が労働力を提供しています。

2年前までは自分の名前すら書けなかった人々が、政府を動かし、地域を変えています。小さな力でも集めれば大きな岩を動かすことができるということを知った人々はもう怖いもの知らずです。

ニムディ村に続け！

ニムディ村の人々の顔は自信に溢れています。大人も子どももよく働き、よその村の人々のためにも協力を惜しみません。SOARSはこの村をモデルにして、住民を主体とした市民社会づくりのトレーニングをネパール全国のNGOのリーダーを対象に行なおうとしています。村づくりから国づくりに夢は広がります。

女性の先生は元気がいい

はたして日本の国際ボランティア活動に未来はあるのか？

「ボランティア未来論」を読んで

なんぶ　新井克己

皆さんは、日本の国際協力ボランティア活動に未来はあると思いますか？
中田豊一氏は著書「私が気づけば社会が変わる・ボランティア未来論」の中で、今のままでは“未来はない”と言っています。私もそうだと思います。

その大きな理由の１つに中田氏は日本の現代社会では「共(＝共同体、市民社会)」が著しく衰退したことを上げています。その上で「問題はそれによって私たちが社会人としてもっとも大切な能力、自分たちの身の周りの問題を自分たちで解決していく能力や技能を失ってしまったことにある。開発援助の惨状が示しているのは、私たちの社会における真のリーダーシップの衰退という現実なのである」と言い切っています。この“「共」の衰退”という考え方は最近の日本社会のさまざまな問題を考える上で核心にせまった一つだと思います。

中田氏が言いたいのは、我々個々人がそのことに気づいて自分たちの問題を自分たちが解決していくプロセスを取戻せば、つまり地道な努力を積み重ねて「共同体」を再構築していけば、地域が変わり、社会が変わり、国際協力も変わる、ということだと思います。

我々は１日も早くそれに気づいて、つまり「自分の足元をよくみて」、少しでも自分の周りの「共」を作る努力をし、そして国際協力ボランティア活動の未来を明るくするために協力して取り組みましょう。その第一歩としてなるべく多くの人が「ボランティア未来論」を読むことをお薦めします。

INFORMATION

ご寄付ありがとうございました

立松幸子　後藤淳子　木村とみ　大塚トシ
肥田弘子　竹内宏代　高木祐子　坪田知子
古賀和子　佐々木裕毅　田中郁子　綾部代美
田端弥生　小坂泰子　竹沢英明　田中松子
長瀬　功　小泉武雄　丸岡和子
宇野ことみ　小泉三恵子　松澤明彦

第2回山手フォーラム
知ってる？アジア

日　時　5月1日(火)～5月4日(金)
場　所　中区山手町234-1
山手234番館（外人墓地より徒歩3分）
内　容　ワークショップ、写真展示、グッズ販売
ネパールの踊りをごいっしょに!!(3日)

KOREAこどもキャンペーン
募金報告

皆様のご協力により175,804円集まりました。3月にメンバーが訪朝し、油と砂糖などを手渡します。

第2回地球の木総会開催のお知らせ

日　時　5月26日(土) 13：30～15：30
場　所　オルタ館（新横浜駅）
正会員の方は是非ご出席ください。
（サポート会員は、オブザーバーとして参加できます。）

広報ボランティアを募集しています。

事務局よりお願い
●転居される場合は新しいご住所を必ずご連絡下さい。
●会費の自動引き落としをご希望の方はご連絡下さい。

インド西部大地震募金受付中

地球の木は「かながわ被災地NGO活動支援委員会」の構成メンバーとして、インドの窮状に対して募金のご協力をお願いします。
募金方法　郵便為替用紙に次の口座番号、加入者名を記入して振り込んで下さい。
加入者名　「地球の木」キャンペーン
口座番号　00260-5-14129
＊通信欄に「インド西部大地震」とお書き下さい
募金期間　３月末まで

エルサルバドル地震緊急支援として、日本キリスト教協議会（NCC）を通し3万円を送りました。

本紙は古紙配合率100%の再生紙を使用しています。